

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

不完全な会計とその可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2001-09-30 キーワード: 作成者: 前山, 誠也, Maeyama, Seiya メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/928

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



不完全な会計とその可能性

前山 誠也

1 はじめに

底知れない不良債権の累積。バブルとその破裂は、わたしたちの経済になお癒えることのない傷跡を残したままである。なるほど、一般に、人は経験から学ぶことはできる。しかし、わたしたちは、このバブルの現象を本当に経験とすることができたのだろうか。

たしかに、時代は日本的な土地神話に根ざす狂騒の時代であった。誰もが反省するように、銀行には土地を頼みとする担保主義への過信があった。あるいは、資金の借り手である企業をみるなら、経営者の無謀な投資、モラルハザードは、類のない、あきれるほどの無責任さであったかもしれない。冷静たるべき舵取り、官僚たちにおいてさえ、自分たちの能力への過信は例外ではなかったであろう。国の施策は的をはずれて、却って、市場の自己治癒の力を損なっていた。

正論といわれる論調によるとき、問題解決の鍵は、規制の緩和とこれを支える開示制度の拡充にあるとされている。なるほど、上に数えた過ちは、こぞって、何らかのかたちでは、わたしたちの社会の固有の情報のありかたと無縁のものではなかったようである。実際、わが国の開示制度は、つとに、その遅れが諸国に揶揄されていることは周知のところであろう。

もちろん、開示は重要であるに違いない。しかし、このような開示の要求は、どのような根拠に裏付けを得ているのだろうか。無反省なままの開示の

コーラスは、これらの声が大きければ大きいだけ、これは、また、これで、もう一つのバブルであったということにもなりかねない。わたしたちの専門分野に限っても、今日の会計へ寄せられる過剰な期待は、根拠もない会計主義への楽観である危険がなきにしもあらずである。

一般にバブルとはファンダメンタルな水準からの根拠のない逸脱である。バブルは、いつの日にか、バブルの破裂を迎えるはずである。わたしたちは、早急に、基本にかえる必要があるとしたい。悪評の高い担保主義は全くに根拠がなかったのだろうか。会計主義は担保主義にとってかわることができるのだろうか。⁽¹⁾わたしたちはこれら毀誉褒貶に曝された二つの情報システムのそれぞれに不完全な情報システムとしての処を与えたい。不完全な情報システムはこれに固有のデザインの可能性があるはずである。

2 不良債権、担保、会計

担保主義の評判は地におちている。マスコミにみられる現在の論調は、大勢、以下のものであろう。不良債権の累積は日本的な担保主義、無責任な融資の審査から招かれたものである。融資は、担保の審査にかえて、情報に基づく合理的な審査に委ねられることが望ましい。⁽²⁾

情報審査の中心は会計に求められている。会計への期待は、このことから、今日、この上なく高まっている。しかし会計はかかる期待に十分に答えるこ

(1) 担保主義の問題点や企業会計への高まる期待については、以下が極めて興味深く、この論文をまとめる上で触発された。山地秀俊編著「日本型銀行システムの変貌と企業会計」(神戸大学経済経営研究所, 2000)。

(2) 不良債権は、不良な貸付と不良な借入の両者あいまつの産物であろう。不良債権が発生することの責任は債権者にも、債務者にもあることになる。ここで、債権者が、当初から、不良貸付を承知して融資すればどうだろうか。たとえば、債権者は、この不良な融資に、取引外の別のかたちの見返りを見込んでいるとしてみよう。不良債権がもたらす損失は、この場合、第三者に転嫁されることになる。ニュースを賑わすことになった融資事件の幾つかは、多分に、このようであったろう。以下の小論では、このような犯罪まがいの融資については、あえて、これを分析の外に留めている。この種の生々しい外部不経済は、わたしたちのミニモデルが扱うには余りに大きすぎるからである。読者の諸氏には、わたしたちが銀行の機会主義をみのがしていると映るかもしれない。小論の本意は、かりに銀行に機会主義がなく、銀行が合理的であってさえ生じるであろう問題を、最小化されたモデルに検討することである。

とができるのだろうか。会計についての過大な期待は、担保主義を支えた土地神話と同じように別の神話ではないだろうか。

担保主義への攻撃と情報開示への称賛は、いわば、一枚のコインの表裏の関係にあるようである。私見では、このような論調は、担保と情報について、暗黙には、以下を主張しているのではないだろうか。担保と情報は二者択一的な関係にある。情報システムの設計は万全にありえて（完全主義）、担保はこれに代替されるはずである（代替主義）。わたしたちは会計が抱えるこのような完全主義と代替主義を問題にしてみたい。

不良債権

誤解を招く物言いであることを承知して、以下のように問うてみよう。不良債権の発生はどのような意味でも好ましくないのだろうか。⁽³⁾ 融資の見返りに、担保の価値は大きければ大きいだけ望ましいのであろうか。あるいは、コストを払いさえすれば、わたしたちは情報システム（ここでは会計）を完全なかたちで入手することができるのだろうか。理想や正義を求める現在の論調は、基本的には、これらの三つの問いに悉く、yesと答えているかの如くである。わたしたちは、現実の世界に住むものとして、自信ありげなyesの返答を躊躇する。わたしたちは、あえて、異論を提起する。

不良債権が発生する貸付けはいつも好ましくないのだろうか。あるいは、不良債権が発生しないなら、これを保証する貸付けは常に優先的に望ましいことになるのだろうか。

わたしたちは不確実な世界におかれている。投資は成功するかもしれないし、失敗するかもしれない。事後の結果は天のみぞ知るであろう。逆にいう

(3) 不良という形容詞は定義上、常に好ましくないという意味あいを含意してしまう。わたしたちの文章は誤解が生じるかもしれない。無用な摩擦を避けるため、ここで不良債権にいう不良とは回収困難ということだけを意味するものとしよう。なお、後述のシンプルなモデルの性格上、この小論では、一つの企業への融資は基本的に一つの投資案件への融資というかたちをとっている。このことから、優良な危険への融資（投資）も、ときに、回収困難、不良債権となる可能性があることになる。

なら、わたしたちは、望ましい投資のかたちを、事後的な成否だけから判断してはならないというべきであろう。高い期待値を約束する危険含みの投資案は、确实ではあるにせよ、僅かな利得だけを見込ませる投資案に勝るはずである。⁽⁴⁾投資のファイナンスが、大半、借入からなされているとしてみよう。上の場合、優良とすべき投資こそが不良債権を招くことになっているのではないだろうか。

債権者（銀行）の立場からするなら、不良債権は、どのような原因からのものであれ、不良債権である。不良な債権はどのような意味でも望ましくないとしてみる。ここで、これへの罰則は禁止的に高いとしてみよう。罰則を相殺する利益参加（たとえば、株式保有）がないかぎり、銀行の融資は、上に望まれる優良投資に向かわないはずである。

ここで、わたしたちの結論は、銀行が、この投資の優良性について、熟知するか無知であるかに無関係であることに注意されたい。情報の保有のいかんは、この限りでは、投資の方向をかえるものではないことになる。いいかえるなら、上で生じる不良債権についていうなら、完全な情報の開示も、これだけでは、問題を解決することにならないことに注意したい。

たしかに、担保主義は非難にさらされている。しかし、确实な担保が利用可能なら、打開の道は単純である。

容易に想像されるように、担保が銀行に供されるとき、融資の道は自ずから開かれることになる。もちろん、ここでの担保の役割は、後述、担保の情報機能とは別のところにあることはもちろんであろう。くりかえすまでもないが、会計情報システムは担保の機能をことごとく代替しうるものではない

(4) 融資を求める企業の内部には、株主—経営者間のエージェンシー関係があるかもしれない。二つの投資案のうち、あとの投資には不良債権が生じないことはたしかである。しかし不良債権が生じないことは、この企業の株主にとっては、望ましい選択なのだろうか。失敗を恐れるエージェント（経営者）の投資選択は、株主の立場からするなら、ある種のモラルハザードである。これに由来する不良債権の「非発生」は、又、社会的にも好ましくないことになる。もちろん、不良債権の非発生にかかわる難題は担保の機能によるだけでは解決されない。小論の関心をこえるが、ここではむしろ、担保とは別に、会計情報の詳細な開示こそが望まれることになるだろう。

ことが知れよう。

不良債権の発生は、ときに、社会的にも甘受されることが望ましいかもしれない。担保がないなら、優良である投資（したがって甘受すべき不良債権）が発生しないおそれがある。

担 保

危険な投資（したがって事後的な不良債権）は、ある場合、引き受けられてよいはずである。もちろん、危険は、その負担に相応しい高収益の可能性で償われていなければならないだろう。優良な投資計画は、無謀で、無意味な投資（投機）から区別される必要がある。

融資の申請者たちは、大半、正直な企業家であるかもしれない。しかし、かれらの一部は、ときに、不正直である。申請者の計画は、投資、投機のいづれであろうか。

仮想の世界に、会計開示のシステムが欠落していると想定してみよう。資金の貸し手は全くの無知のままにおかれるのだろうか。

最小限、一人の賢者がいるはずである。ここで、融資の案件（投資）はその良否を借り手の側に知られている（判断されている）ことに注意しよう（内部情報）。情報保有者の内部情報は、どのように、外部に伝達されるだろうか。

わたしたちは開示システムが欠けているとした。上記の内部情報は、このとき、その内容の逐一を外部に詳らかにしえないはずである。外部者が会計開示だけに頼るなら、かれ自身には、優良な投資物件が不良な投資物件から区別できないことになる。融資の流れは滞ることになる。ここで担保が供されればどうだろうか。

会計がない場合、担保を供する債務者は、投資案の内容を開陳することはない。ことの反面、かれらは、ここに、自らを賢者（優良投資案の保有者）として、かれが優良投資案を保有していることを担保からシグナルしている

ことになる。⁽⁵⁾もちろん、かれらのひそかな判断は誤っているかもしれない。しかしながら、例外的な場合を除いて、この良否の判断は、この賢者にこそ、もっともよく知られているはずではなかろうか。あるいは、万が一、判断に誤りがあったとしてみよう。予信者は、債務者の誤りを、担保物件を通して回収出来ることになる。担保は賢者の判断の結果だけを情報として伝達していることに注意してほしい。いわば、担保は回収の保証と情報の保証という二重の役割を果たしていることになる。

担保が優良な投資案に供されているとしてみよう。事後的な投資の失敗は与信者を損なうところとならないはずである。しかし、ここに生じる担保の利益は、ひとり、与信者だけに生じているのではない。むしろ、担保の役割は、これがはじめて可能にした優良な危険への融資にこそあるだろう。ここに導かれる投資の実行は社会を利することになるはずである。

ここで、担保の有用性を認めるとして、担保の提供は、これが大きければ大きいだけ、常に社会的にも望ましいのだろうか。わたしたちは、上の事例に、投資案件の良否は融資をうける賢者（借り手企業）にもっともよく知られているとしている。ここで、この仮定を反省してみることにしよう（たとえば winner's curse を想起されたい）。極端なケースに、企業の投資計画は全くの思い違い、その誤りは銀行の側に確信できるとすればどうだろうか。担保が過大にある場合、貸し手は融資をためらうことの原因はないかもしれない。銀行に生じるモラルハザードは社会的には好ましくない結果を招くはずである。

伝統的な経済分析は資源の希少性を分析の中心においている。ここでは以下のようにも主張できるかもしれない。企業がシグナルできる担保は希少である。担保の総額は、企業の有する幾つもの優良投資に対し、多分に不足す

(5) 情報の非対称性は近年、経済学の入門的なテキストにも、恰好の話題である。かれらのポピュラーな分析に、融資に提供される担保は、そのシグナリングの合理的な機能がむしろ「積極的に」評価されている（担保の提供は優良な借り手に、資本コストを節約させるはずである）。日本の担保主義に向かう非難は、これが的を得ているとしてさえ、このような担保のシグナリング機能を無視できないのではないだろうか。

るかもしれない。⁽⁶⁾ 今、安全を求めて、一つの投資案に、潤沢な担保を要求すればどうだろうか。優良な投資案の幾つかは、これが融資に相応しい危険であるにもかかわらず、これを銀行にシグナルしえないことになる。過剰な担保の要求は、ここでは、社会的にもマイナスであろう。

ともあれ、担保の過不足は、そのいかんをとわず、問題を残すことになる。融資の難題は、ひとり担保だけが解決する訳ではなさそうである。

3 内部情報、外部情報、準内部情報と credibility

担保システムが「理想的に」働いたら、担保システムの外に、ことさらの情報システムは不要であるかもしれない。融資は安全であって、融資は優良な投資だけに向けられていることになるからである。しかし、担保は潤沢にはなさそうである。あるいは、担保の価値は市場に変動的でもあるだろう。くわえて、社会的な観点からするなら、仮に担保物件に何らの問題はないとしてさえ、銀行のモラルハザードや企業の楽観主義は、担保への全面的な依拠を疑問とさせるかもしれない。

仮想の世界から現実の世界に目を移すことにしよう。与信者（以下、銀行をとりあげることとする）は、融資に際して、種々の情報の入手に努力するはずである。もちろん、かれらは担保が伝えるシグナリング機能だけに依存するわけではない。銀行は借り手の側に会計情報を要求するであろう。あるいは、ときに、銀行は企業に役員を直接、派遣して内部情報を得ようとするかもしれない。自明の故に、忘れられがちであるが、融資に際しては、価格（融資利率）の提示が不可欠である。取引に不可避の価格情報は、他の何に

(6) 投資案に不足があるなら、担保の不足は問題にならないかもしれない。過大な担保の要求は、これの限りで、問題を生じない。あるいは、投資案が潤沢にあっても、与信者の資金供給に不足があるなら、同様である。担保の必要性は資金の供給量に上限を画されるからである。わたしたちが扱う会計情報の問題にとって、銀行資金の供給が相対的に過剰であるか、不足であるかは、このような意味で、決定的に重要である。

もまして、企業についての基本情報を伝えるはずである。

わたしたちは、かつて、日米の銀行をめぐるコーポレートガバナンスと関連して、銀行に利用できる情報戦略、とりわけ価格情報と内部情報の関係について取り上げたことがある⁽⁷⁾。しかしながら、そこでの分析モデルでは、銀行に関係の深い担保情報や会計情報に特有の問題点については、なお未検討のままに残されたままであった。以下では、先のモデルをベースにしながら、これらの未検討の問題点を中心に、情報システムの不完全性とこれらの間の相互の補完性について分析を進めることにする。

並列的に機能する情報システムを整理することからはじめたい。企業にかかわる情報を以下の二つの軸から区分しておこう。

内部情報、外部情報、準内部情報⁽⁸⁾

内部情報——ある種の情報は、いかなる情報チャネル（たとえば、会計システム）の構築を通して、これを伝達しえない。いわば、内部である現場への直接的なコミットメントだけがこの種の情報を入手可能とすることになる。わたしたちはこのようなかたちにある情報を内部情報と呼ぶことにする。

外部情報——すべての取引は、取引そのものの論理から、あるかたちの情報を取引に不可欠としている。取引にかかわる当事者は、必ずや常に、この情報を外部にあらわすはずである。ここでは、かかる種類の情報を外部情報と呼ぶことにする。たとえば、価格は、どのようなかたちにしろ、この提示がない限り、取引を成立させないはずである。あるいは、現金による取引決済は、将来のいつかの時点で、必ずや招来するであろう。価格の大きさや

(7) 前山誠也、「アメリカのコーポレートガバナンス」(「現代のコーポレートガバナンス」所収、神戸市外国語大学、外国学研究49)、2001。

(8) ここに区分される内部、外部の情動的な関心は、通例、了解されている内部情報、あるいは公開された外部情報への関心に同じくしないことに注意されたい。たとえば、一般的にいうなら、内部情報とは外部者に disclose されていない内部者だけの情報というほどの意味であろう。このような了解をとるなら、わたしたちにいう準内部情報は、これがなお外部に伝達されていないかぎり、内部情報であることになる。あるいは、同じく、法律上、開示が義務づけられた情報は、(準内部情報ではなく)、外部情報とされるはずである。わたしたちにいう内部と外部の区分は、むしろ、論理的な次元における伝達可能性の区分である。なお、わたしたちが整理した内部、準内部、外部情報の三分は EMH に関する strong, semi-strong, weak への区分に並行性を伺わせるが、問題の意識は別である。

決済の遅延は、取引の当事者について、きわめて重要な何らかの情報を外部に告げていることになる。価格のやりとり、あるいは企業のキャッシュフローは代表的な外部情報といえるだろう。

準内部情報——一般に情報の伝達は内部と外部のかたちだけに厳格には区分けできないかもしれない。たとえば、伝達不能ではない情報も、ときに、外部に伝達されないままであるかもしれない。わたしたちは、この種、裁量におかれる情報を準内部情報と呼ぶことにしたい。準内部情報は外部に伝達可能ではあるが、外部に伝達されることの保証はない。多分に、会計にかかわる情報は、性格上、この種の情報であるといつてよいだろう。

credibility

今、何らかのニュースが飛び込んできたとしてみよう。情報ソースが不明なら、ニュースの真偽は不明ではなかろうか。情報ソースの信頼性（善意か悪意か）はニュースの内容の信頼性（真か偽か）と、ひとまず、区別されるはずである。わたしたちは、ここで、会計情報を整理するもう一つの分類軸を用意しておきたい。情報ソースは、これの善意が自ずから、期待できる場合、システムについて credible であるということにする。

上の意味での credible なシステムは、ニュースの内容に及んで、情報が正確、誤りがないことを保証するものではないことに注意してほしい。あるいは、厳密にいうなら、ニュースが誤りを含まないことは、このニュースが事態を余すところなく詳細に告げていることとは、又、別の問題であろう。

一般に、情報はその内容について曖昧さを残すとき、fuzzy とよばれることがある。わたしたちの世界では、情報は、同じく、そのソースの credibility についても、fuzzy であるかもしれない。credibility を確信させる情報は、これがどのようなかたちにあるにせよ、きわめて重要である。

会計情報や担保情報は代表的な準内部情報であるといつてよい。これらの情報は、それぞれに、準内部情報としての性質から、credibility にかかわる

やっかいな問題を抱えているに違いない。⁽⁹⁾ 準内部情報は、これまで、この credibility について十分な検討を得てきただろうか。

伝統的な経済学の世界に、担保や会計の情報は、純粋な理論の上では、登場するところではなかった。新古典派の一般均衡は、価格に尽くされる情報の完全性に加えて、市場のプレーヤーが破産を免れていることをも強制するからである。オークションに調整される取引に違約はありえない。あるいは、このような理論に、会計の仕事を象徴する利益情報は、余すところなく、credible な価格情報に還元されている。

たしかに、取引の成立は担保や会計を不可避の条件とするものではない。価格のシグナル（外部情報）は、理論モデルの世界では、経済的な資源の最適配分を導くに必要かつ十分な情報である。ところで、わたしたちの金融の世界はこのようなモデルにシミュレートするには余りに生々しいはずではなからうか。プレーヤーの破産は日常の茶飯事である。現実の融資の世界は準内部情報の利用を余儀なくしている。担保や会計は、準内部情報としての特性が検討されるべきことになる。⁽¹⁰⁾

今、会計チャネルは利用できないとしてみよう。わたしたちの上の定義から、企業情報はことごとく内部情報である。ここでは内部の情報は外部情報である価格を介してか、あるいは担保を介してのみ、伝達されることにな

(9) 売手にとっての売値（価格）は、同じ大きさで、買手にとっては、買値（価格）である。一つの取引に売値と買値が食い違うことはありえない。あるいは売手（買手）が価格をオファーすることは、相手がこれを同意したあと、あらためて価格を覆すことがないことを約束しているはずである（発話は遂行的である）。外部情報としての価格は、このような意味では、基本的には credible であるといえよう。

内部情報についてはどうだろうか。内部情報は現場の当事者たちだけが共有することのできる情報である。このような性質から、ここには共有する情報ソースについて、この credibility の問題は生じない。このように考えるなら、わたしたちにいう credibility は、とりわけ、準内部情報の局面においてだけ発生する難題であろう。

(10) 担保（シグナリング）は、担保を供するプレーヤーの善意を保証する一方、かれが自らを誤って評価していることの可能性を排除しない（ただし、外部者にはこれは不明である）。担保は、このことから、情報の一つの面においてのみ、credible である。会計情報においてはどうか。準内部情報としての会計情報は、誰に、どのようにも伝達されることができる。会計情報をシグナルすることは、この善意と内容についての説得に、credibility の難題をかかえることになる。

⁽¹¹⁾ る。もちろん、わたしたちの関心は会計にある。しかし、このような仮想の世界で、担保と価格の情動的な役割を反省しておくことは、会計の限界を教えるかもしれない。

前稿の設例にならうことにする。わたしたちは、前例に、準内部情報を捨象し、プレイヤーの情報戦略を外部情報と内部情報のかかわるところだけに限っていた。プレイヤーは価格シグナルを戦略的に選択することが出来る。あるいは、ときに、かれらはコミットメントを求めて、内部情報に参加することを可能としていた。ここで準内部情報を導入してみよう。わたしたちは、手始めに、ここで担保が部分的に利用出来るとする。

融資を願うプレイヤーは三タイプからなる三企業（優良、普通、詐欺）である。プレイヤーたちの資金需要は、それぞれに、一単位としておく。銀行に供給可能とされる資金の総額は一単位であるか（資金不足⁽¹²⁾）、あるいは二単位である。優良、普通の二企業に、投資の機会利子率は r_1 , r_2 （ただし、 $r_1 > r_2$ ）としよう。詐欺的企業に収益の見込みはない。

資金が不足する場合、解決は簡単であろう。資金の供給は一単位のみである。銀行は優良とみられる一企業だけをスクリーンすれば足りることになる。外部情報（融資利率 r_1 のオファー）にあわせ、準内部情報（担保）付きの借入の希望を募ればよいはずである。⁽¹³⁾ 普通企業は高い融資利率（外部情報）の受けいれを、詐欺的企業は担保の提供（準内部情報）を見合わせるようになる。融資の応募はこれらのタイプにみられないはずである。資金供給が不足

(11) ハイエクにならうなら、各々の個人は自らの情報を誰にもまして熟知していることになる。あるいは、このような内部情報は多分に外部に伝達しがたいものである。かれにしたがうとき、市場における価格はこのような内部の情報の伝達を不要としていることになる。

(12) ここで資金不足とは、収益性の十分な投資機会（優良、普通の二単位）にもかかわらず、資金供給（一単位）が不足していることをいう。

(13) 担保がないなら、 r_1 シグナルに、不良な詐欺的企業は排除されないことに注意されたい。このとき一単位の資金は優良、詐欺の二企業に按分されることになる。優良企業（したがって社会ということでもあるが）は、投資に必要な一単位の融資を部分的に実現できない。一般に価格情報に難題がある場合、資金の調整は数量調整であることになる。

するケースに、会計情報（準内部情報）は不要、事態を改善することはない。⁽¹⁴⁾

資金が潤沢、二単位ならどうだろうか。上に提示された担保つき r_1 条件の融資システムは資金の一部（一単位）を未利用に残すことになる。外部情報の調整が不可避、融資利率は r_2 のかたちでオファーされるはずである。担保が利用できないなら、詐欺的企業は排除できないことに注意してほしい。二単位の資金は三企業へ按分されることになる。優良、普通の二企業は、供給されるに相応しい資金の需要を十全には満足させないことになる。

担保が等しく利用可能ならどうだろうか。担保つき r_2 条件の融資を眺めてみよう。ここでは、優良、普通のタイプだけが、融資の募集に諾で答えるはずである。詐欺的企業は排除されることになる。もちろん、融資をうける二企業は、銀行の目に、それぞれの特性をここに区別されないままである。ともあれ、潤沢な担保の導入は詐欺的企業の機会主義を解決することとを注意しておきたい。

機会主義のノイズから、価格シグナル（外部情報）は担保（準内部情報）を欠いては十分に機能しない。一方、借り手が担保を供することの決定は、あくまで、融資利率（価格）の水準にかかることにも注意してほしい。担保情報（準内部情報）は価格情報（外部情報）と独立しては得られないからである。担保情報と価格情報は相互に補完的なかたちをとりながら、融資をめぐる情報の非対称性を解消することになるだろう。ただし、ここで得られた解決は、借り手が自らの情報を最善に知るものでないなら、危険を伴うものであるかもしれない。

(14) ただし、内部情報にエラーはないとしている。

4 不完全情報システムとしての会計

担保情報の導入は優良、普通の二タイプを詐欺的タイプから区別した。優良、普通の二タイプは、なお、ここでは識別されないままである。⁽¹⁵⁾もちろん、担保に得られる識別は、ここでの設例の限りで、銀行の融資には十分である。しかし、借り手のタイプの識別がなお詳細に要求されればどうだろうか。わたしたちは優良と普通の二タイプを合理的に区別できるのだろうか。

準内部情報のスコープを広げてみよう。わたしたちは担保とは別に会計情報の利用が可能であるかもしれない。ここで会計情報の役割と能力を反省しておく必要がある。

なるほど、担保がある場合、困難の多くは解決されているかもしれない。しかし、担保は潤沢なかたちに保証されている訳ではないはずである。銀行は、このとき、担保に替える手立て（別のかたちの準内部情報（会計））を必要とすることになる。いかなる場合に担保が、また、別のいかなる場合に、会計が用いられることになるのだろうか。あるいはわたしたちは会計に万全を期待することができるのだろうか。

担保によるシグナリングは、直接的にはこれを供するプレーヤー自身にかかわる情報であった。担保の提供は、少なくとも、このシグナルの送り手が善意であることを保証する点において credible である。なるほど、担保情報は、このような意味で、credible であることになる。しかしながら、ここに保証された credibility は、送られた情報が、その内容に及んでまで、エラーを免れていることを意味しないであろう。担保を差し出すプレーヤーは、かれの善意とは無関係に、自らの投資を過大に評価している可能性を否認しない

(15) たとえば、担保が利用できるなら、外部情報 r_1 を第一ラウンドに、 r_2 を第二ラウンドで担保の要求とともに連続的に二回オファーすればどうだろうか。たしかに、これが可能なら、三タイプは区別されそうである。しかし、かかる手続きは、価格情報が credible なければならないとする約束に反している。くわえて、このような条件では、優良タイプこそが不利益な利率を甘受しなければならないことになって、不自然である。

からである。かかるエラーの可能性は、たとえば、担保が潤沢に供される場合においてさえ、銀行の融資を好ましくしないとするのではなからうか。与信者たる銀行は会計情報を要することになる。善意の送り手からの会計情報は、送り手にまして、受け手の側によく解釈のエラーを免れる可能性があるかもしれない。

誤解をさけるため、わたしたちの問題意識を繰り返しておこう。わたしたちの情報システムは、こぞって、不完全である。会計情報は必要、かつ同時に、ファジーである。担保と対照させるなら、ここでの会計は、二つのかたちで、担保にかわっての credibility を問われることになる。会計情報は善意からくるものだろうか。会計情報は内部者の情報を万全に伝えているだろうか。いわゆる監査や会計における真実性の問題は、これらの二つの credibility がファジーであることの難題であるともいえよう。会計情報は本来、理想的なかたちの表現システムを入手し得る保証はない。わたしたちの分析は不完全な表現としての会計に向けられることになる。

モデルの構築

準内部情報について、もう一つの世界を考えてみよう。担保は利用不可能、わたしたちは会計システムだけを利用できるとする。

会計システムは完全なかたちでありうるのだろうか。たとえば、伝統的な会計は、古くから、絶対的な真実性を到達しがたいとしてきたところである。ところで、このような場合、わたしたちは、あるほかない不完全性を、可能な限り、完全なところへ近づけるべきなのだろうか。一般的な見方によるとき、理想（完全性）に向かうあらゆる努力は、これがどのようなかたちであれ、望ましいものとされてきたらう。しかしながら、わたしたちの事態は、さほどに、楽観的ではありえないかもしれない。⁽¹⁶⁾

(16) ここでの問題は、いわゆる会計システムに要する通常のコストの問題ではない。わたしたちの場合、ここでは、このような準内部情報のコストはゼロであると想定している。なおこの小論に直接かかわるところではないが、わたしたちの問題関心からするなら、むしろ、コスト

企業という全体像は、たとえばこれを企業価値といった何らかの一つの理想のスカラーから一度に表現することは不可能である。企業の全体像は多くの次元を含んでいる。理想的な全体把握があるとして、これは、多分に、ベクトルのかたちに表示されるほかないのではなかろうか。わたしたちに期待できる理想の全体像とは、ベクトルを構成する諸変数が、こぞって、完全に入手されていることにほかならない。

上のように考えるとき、完全システムが不可能であることの想定は、これらのベクトルの諸変数が、同時には、完全なかたちに獲得できないことを想定することに等しい。今、あるシステムが、一変数を除いて、他の諸変数を理想的なかたちに獲得しているとしてみよう。わたしたちは、このとき、これらの変数の理想値を保存しつつ、残された一変数だけを、可能な限り、満足なかたちに求めればよいのだろうか。ここには、ある種、second best theorem が成り立っているかもしれない。理想のゴールは到達を阻まれている。向かうべき会計の方角は微妙であることになる。入手すべき諸変数は、この場合、こぞって、不正確、いわば理想点から、こぞってのずれを含むことをベターとするかもしれない。ファジーな会計システムは、ここに、処を得ることになるかもしれない。

わたしたちは会計情報システムが「論理的に不完全」であるとした。わたしたちの主張はいささか了解しがたいかもしれない。会計に求められる具体的な詳細に先立ち、出発点に、不完全ということの意味あいイメージのかたちに掴んでおこう。

滑らかに曲がりくねった道があるとする（本体）。このような本体は、地図（あるいはグラフ）上に、微分可能な連続関数（ $F(x)$ ）をもって完全に表現できるとする（写体）。ここで、わたしたちが、写体として、ステップ

がかかる情報は外部情報であり、内部情報である（約束やコミットメントは、これに制約されるコストを回避できないからである）。

関数 $G(x)$ だけを利用可能としているならどうだろうか。ステップ関数のどのような工夫も、論理の上から、本体のグラフ上の表現を不完全におわらせるはずである。私見では、企業の活動が会計を以て不完全に表現されるとは、いわば、このような事態のことを指しているのではなかろうか。連続する企業活動（いわばアナログであろう）の期間ごとの数値化（デジタルの表現）とは、いうなら、このような状況にあるともいえるかもしれない。

わたしたちはステップの幅 (a) をどのようなにも小さくとることができる。しかし、どのような二つの状況 $F(x)$, $F(x+a)$ も、これらの二つが同じステップの上に表現されるなら $(G(x)=G(x+a))$, F は、ある部分、関数 G によっては、識別できないはずである。「近傍にある二つの状態はファジーに伝達される」だけである。

先の融資の設例に戻ってみよう。わたしたちは借り手の三タイプ（優良、普通、不良）を、現実の会計情報を使って区別する必要がある⁽¹⁷⁾。たとえば、利益会計システム $G(x)$ がこれらの三企業について利益を計算しているとしよう⁽¹⁸⁾。利益数値の大小は三企業を識別できるだろうか。会計がファジーにとどまるなら、会計は諸企業の近傍については区別できないことになる。ここで、近傍とは隣接する二企業をいうものとしよう。優良企業の業績はときに普通企業の業績と似通うところであろう。優良企業は、普通企業から、たしかには、線引できないことになる。もちろん、このシステムに、優良企業はどのような不良企業からも区別できることは重要である。不良企業についていうなら、不良企業はいくつかの普通企業からは見極めを得ないというほかない。普通企業については厄介である。普通企業は、ある部分、優良らしいことの反面、別のある部分に、不良らしいからである。ともあれ、ファジー

(17) わたしたちのモデルの諸企業は、本体の順序関係を非連続、離散的（1, 2, 3）としている。説明の例にとった関数のイメージとの衝突が指摘されるかもしれない。ただし、ここでの説明は、あくまで、簡単なイメージを掴む上だけのことにはすぎない。わたしたちの本意は、本体との関連に、写体がファジーであること、本体における近傍状況は、一般に、会計が利用できる写体には十分に捉えきれないことを操作的にモデル化することにある。

(18) 蛇足ではあるが、三タイプの会計利益は G （優良）、 G （普通）、 G （不良）である。

な会計は企業をファジーなかたちにだけ区別するとしてみる。

ここで、このファジーな会計の役立ちを考えてみよう。ファジーな会計システムの役立ちは状況次第である。

たとえば銀行資金の供給が不足している（一単位）としてみよう。銀行は融資にあたって、会計情報を要求する。先にもみたように、銀行が外部情報として r_1 を提示すればどうだろうか。普通企業は融資価格 r_1 の水準にペイしないはずである。普通企業からの申し込みはない。銀行は優良企業を不良企業だけから区別すれば足りることになる。上のファジーな会計は、ファジーなままで、これらの区分に十分な責務を果たし得るだろう。担保は不要、あるいは担保はこの状況に節約できたことになる。

不良企業はファジーな情報を偽らないのだろうか。なるほど、ここでは、会計情報は、担保情報が有している *credibility* を欠くかのごとくである。しかし、不良な企業の情報操作も、論理の上からは、操作に限界があるはずである（監査を含んで、ファジーな会計システムに、最小限の能力は約束されている。近傍の二企業についてはともあれ、距離をおく二企業については、監査による両者の識別はシステムに可能とされている。不良企業についていうなら、普通企業への装いはともあれ、優良企業への装いは、その糊塗が困難であるはずである⁽¹⁹⁾）。ともあれ、先の担保情報における場合と同じく、ここでも、会計情報は価格情報とあいまって役割を得ていることに注意してほしい。

資金供給に不足がない（二単位の）場合が問題である。銀行は融資に相応しい二企業をスクリーンする必要がある。ファジーな情報は不良企業だけを排除できるだろうか。

(19) もちろん、この監査についても、現実には、なお問題は残るとされるかもしれない。たとえば、監査人は上の能力とは別に、かれらの善意についても、*credibility* が問われるであろうからである。しかし、かく危惧するなら、たとえば、*credible* といわれる担保情報についてさえ、事態は未解決ということになってしまう。担保は、不良企業に、事後、執行を妨害されるという反論も可能だからである。

資金供給（二単位）は潤沢である。銀行は資金の需給を一致させることを社会から要請されるかもしれない。⁽²⁰⁾ 銀行は、融資を、外部情報 r2 のかたちに提示することを必要とすることになる。資金の供給は三者からのこぞっての申し込みをうけることになる。ファジーな会計情報は不良企業を普通企業から線引することができない。ここでの事態は担保が不足する先のケースに基本的には同じである。ファジーな会計は、この限りで、善良なプレーヤー達に満足のいくものではないだろう。しかし、ファジーな会計はなすすべもないのだろうか。

ここで、わたしたちの情報システムは、外部情報など複数のシステムの協同の上に、補完的に機能していたことを思い出してほしい。完全性を阻まれる個々の会計システムは、これらの幾つかが同時に適切なかたちで設計されるなら、事態の解決に道を開かないだろうか。

5 ファジー会計システムの補完性

ファジーな情報システムは、システムの間、補完性を待つことになる。たしかに会計システムはファジーである。しかしファジーな会計は複数にもあって、わたしたちはこれらを同時に補完的に利用できるのではないだろうか。議論に先立ち、ここでもイメージを掴んでおく必要がある。

たとえば、列車の運転を考えてみよう。列車は最高速に走るか（優良）、中速に走るか（普通）、止まっているか（不良）である。列車が中速に走る場合、加速しているか、減速しているかのいずれかであるとしてみよう。列車に窓はない。列車の速度（最高速、中速、停止）が問われているとしたい。

今、速度計（完全システム）は利用できないとしてみよう。列車の速度の状況はどのように知られるだろうか。速度計が欠けるこのような列車の状況

(20) 具体的には、いわゆる銀行の貸し渋りへの批判がこれにあたる。

は、わたしたちの融資のケースにも繋がるはずである。

車内の乗客は窓の外をみることができない。列車が最高速に走行する場合、乗客はこれを停止状態と区別できないのではないだろうか。列車が中速なら、かれらは加速（減速）の体感を得ているはずである。車内の乗客は、かれらが感知する情報から、列車が中速に走っていることを知ることになる。車外の観察者についてはどうだろうか。車外の観察者は、もちろん、列車が走行しているか停止しているかをみることができよう。一方、かれらの目に、列車が最高速にあるか、なお中速にあるかは見極めがたいかもしれない。このような二つの観察を内部、外部と名付けるならなら、ここでは、内部システムも外部システムもファジーであることになる。

内部、外部が単独にあるなら、情報は不完全なままである。しかし、これらの二つが補完的に働いたら、速度計（完全システム）に同じくする情報が得られるはずである。ここで、人は、同時に、列車の内と外にいることは出来ないことに注意しておこう。列車の速度を正確に知る上で、内と外のコミュニケーションは不可欠である。たとえば、乗客の体感（内部者の情報）は準内部情報として、外部の観察者に伝えられることが望まれるのではなかろうか。いわば、情報システムの補完性は独立した不完全システムの間での協同に可能となっている⁽²¹⁾といっておく。

先の融資の例にかえてみよう。資金が潤沢にある場合、外部情報は企業

(21) わたしたちの場合、車内と車外の二つのシステムはファジーであってよいことになっている。しかし、ここで二つの観測システムは独立していること、かつ、二つの間には円滑なコミュニケーション（協同）が必要とされることは、ある面、興味深い。このような意味でいうなら、内部者と外部者との距離のとりかたはきわめて重要である。距離が近すぎるなら、相互の干渉が生じて、独立性が阻害されることになる。一方、距離が無限なら、コミュニケーションに要する時間は情報の適時性を喪失させるであろう（車外（車内）に伝えられた内部（外部）の情報は、厳密には、過去の時点の情報である）。二つのシステムに求められる距離の大きさはこのようなトレードオフから定まることになる。

なお、ここで、干渉とは、たとえば、つぎのような事情を指している。列車に近づく外部の観察者は列車の加速の大きさについても、いくぶんかの情報を得るかもしれない。しかし、このような情報は、本来、両者の間に協力的なコミュニケーションがある限り、余分なはずの情報である。外部者が入手するリダンダントな情報は、ときに、ノイズとなる可能性がある。

の選別に、何らの機能を果たし得なかった。列車の事例にならってみよう。別種の会計システム ($H(x)$) が先のファジーな利益会計システム ($G(x)$) を補完する必要があることになるのではないだろうか。もちろん、ここでも、 $H(x)$ はファジーであるに違いない。しかしながら、ここで、ファジーな $H(x)$ の特性が、普通企業を不良企業から識別できることにあるなら、事態は解決である。問題解決の可能性は、わたしたちの会計が、果たしてこのような特性を有するシステムを見いだし得るか否かに懸かることになる。

なるほど、利益が日常の尺度に了解されるとき、普通企業は不良企業の近傍にあるほかない ($G(x)$)。ことの反面、利益の測定が所詮、不完全におわるなら、企業の測定は別の尺度にもデザインされてよさそうである。今、 $G(x)$ とは別軸に何らかの新しいシステム $H(x)$ が選ばれたとしてみよう。不良企業は、この軸に測って、むしろ、普通企業に遠く、優良企業の近傍にあることになるかもしれない。普通企業は、このとき、不良企業から明確に区別されることになるはずである (たとえば、列車の例に、加速度の尺度がとられるなら、停止は、むしろ、最高速の近傍にあったことに注意されたい⁽²²⁾)。ファジーにある二つのシステムは、これらのシステムが同時に働くとき、厳格な識別を達成しえたことになる。ファジーな $H(x)$ はファジーな $G(x)$ を補完している。

会計システムにおける $G(x)$ 、 $H(x)$ の設計が問題である。わたしたちは、何を以て日常の $G(x)$ と了解し、何を以て、これを補う $H(x)$ とすべきであろうか。あるいは $G(x)$ が、たとえば、利益測定システムと了解されているとして、わたしたちは、 $H(x)$ を新たに、どのように求めることが

(22) 会計利益システムの検討に、速度、加速度などの事例を持ち出すことには批判が聞こえそうである。しかし、井尻の三式簿記の構想に、微分的三式簿記が具体化されていることに注意されたい。ここでは、財産や利益などに関連して、これらの相互の関連が、速度や加速度などとのアナロジーに説明されているところである。井尻雄二、「三式簿記の研究」(中央経済社、昭和59年)、井尻雄二、「利速会計入門」(日本経済新聞社、1990年)。

できるだろうか。紙幅の制約と問題の予想される大きさから、この小論では、このような方向への考え方だけを整理しておくことにしよう。

会計の歴史を振り返るとき、会計システムをめぐっての賑やかな提言は、多くの場合、ある一つのシステムが別のシステムに勝ることの積極的な提言（学説）であったように思われる。いわば、これらの論争は either or を鋭敏に論じる一方、両者を許す both の方向を切れ味が鈍いとして排してきたとってよいだろう。たとえば、静態論か動態論か、原価主義か時価主義かなど、利益をめぐるポピュラーな論争を思い出されたい。わたしたちのこの傾向は、最近時に至っても、たとえば cash flow か income flow かの問いにみられるように、システムの二者択一を求める一点に、かわりはないようである。

ところで、このような主張のあり方は、多分に、ある何らかのシステムが、理論上、他を排して、完全であり得ることを主張していることにほかならないのではないだろうか。上にもみたように、わたしたちはかかる理論のたてかたを拒否している。どのような会計システムも不完全、いかえればファジーであるほかないからである。わたしたちは、切れ味が鈍い会計であるとの批判を甘受しても、複数のシステム（both）を求めねばならない。⁽²³⁾

わたしたちが抱える問題はシステムがファジーであることにあるのではない。むしろ、わたしたちはファジーであるほかない会計のシステムがどのようにうまく調整できるかを問わねばならないとしたい。⁽²⁴⁾ ファジーな複数のシステムはファジーなままで補完的なかたちに設計される必要がある。また、これらの複数にある会計システムは会計の外に利用できる情報（内部情報、

(23) このような意味で、bothの可能性を主張した例外的な先駆けはASOBATの多欄式報告書ではなかろうか。

(24) たとえば、伝統的な複式簿記が損益計算書と貸借対照表に利益を二重に計算してきたことの意味など、単なるおごなりの形式的な扱いをこえて、現代の情報分析の観点からの再検討の必要があるのではないだろうか。かかる二重性の制約は、ファジーなかたちであるにせよ、多分に、システム自身の信頼性を補強しているようにも推測されるからである。また、このような関連では、FASBに示唆される非連携アプローチの可能性など、ここでいうcredibilityの立場から、なお、深く突き詰められてよいように思われる。

準内部情報としての担保、外部情報)との関連にも検討されるべきものだろう。会計システムはファジーである。ファジーな会計の特性は、オブジェクト情報の次元にも、又、システム情報の次元にも免れない。事態がこのようなら、ファジーな状況の調整は、これらの錯綜する領域にも及んで、問われるところであろう。⁽²⁵⁾

6 むすびにかえて

わが国の金融危機に少し先立つかたちで、アメリカは、貯蓄貸付組合(=S&L)の破綻を経験した。事件を招いた人間の途方もない欲望、また破綻の救済に向かった公的資金の巨額の投入は、両国において、基本的には同

(25) *補論

この小論では $G(x)$ や $H(x)$ の詳細については、展開することができなかった。具体的な主張に欠けるのではないかの批判を予想し、ここで、補論だけではあるが、一言しておく。

普通企業に遠く距離をおくかたちで、優良、不良の二企業は、どのような角度から、これらが近傍にあるといえるのだろうか。会計がかかわる場面に、このことの意味あいを推測しておくことは、 $H(x)$ の具体的な設計の方向づけにも繋がると思われる。以下、幾つかの状況とここから予想される $H(x)$ への候補(案)を試みにあげておこう。

(1) 優良企業は多分に優良な投資機会に恵まれているはずである。優良企業は、好調な営業収益を以てしても、将来への投資資金は、なお、不足しがちである。不良企業は、別の理由(売れ行き不振)から、資金繰りに苦慮していることが通例であろう。cash flowを一つの視角にとってみよう。皮肉にも、上のことから、普通企業こそは、投資機会の不足との関連で、free cash flowを潤沢に残している可能性がある(たとえば、Jensenのfree cash flowの議論はよく知られるところである)。cash flowを軸にとるなら、普通企業にもまして、これらの二つの企業は近傍にある可能性があるのではないだろうか。

(2) 報酬契約の天井から、経営者は、多分に、ある水準以上の利益の計上を無益と考えるかもしれない。あるいは、逆のケースに、経営者は外部からのsanctionを恐れて、ある水準以下の会計利益の計上を回避しがちである。このように考えるなら、会計的なmanipulationは、優良、不良の両極の状況に、誘われているのではないだろうか。たとえば、これと関連して、会計方針の変更や、あるいは会計発生高の水準は、その特性を、優良、不良の二企業について、むしろ、これらを近傍におく可能性がある。

あくまで一つの推測にすぎないが、会計における利益情報($G(x)$)のファジーな順序関係は、上のかたちの別の角度のファジーな順序関係に補完されるかもしれない($H(x)$)。

もちろん、これらの推測は、あくまで試論としてのイメージを掴むこと以上の意味はない。しかし、たとえば、近時ポピュラーなキャッシュフロー計算書は、このような二つのかたちを通して、普通企業を不良企業からファジーに区別する $H(X)$ の候補になりえないだろうか(この計算書はフリーキャッシュフローの大きさや、会計発生高の情報を告げているはずである)。なお、これらの候補の幾つかは日常の $G(x)$ に異なって、送り手のシステム情報につき、ある面、よりcredibleとなっていることにも注意しておこう(cash flowはhardな測定である。あるいは会計方針の変更は、パラドキシカルではあるが、manipulation自身を糊塗できないという意味では、credibleである)。もちろん、利益システムを補完するシステムは、なお、多様なかたちでありうるはずである。興味をひく問題であろう。多欄式評価、また井尻の三式簿記についても、このような方向への可能性を推測しておきたい。

じである。噴出した表面の経緯をみる限り、アメリカの先行事例は、日本がかかえる現在の金融上の困難を照らす恰好のモデルになりそうである。たとえば、預金保険を一つの担保とみなすなら、アメリカにおけるモラルハザードも、日本とは別のかたちにあったにせよ、同様、ある種、債権者の担保主義が招いたモラルハザードであったといえなくはない。

モラルハザードが問題なら、これを防止する手立ては、いずれの国においても求められて当然である。たしかに、広く担保主義には、あるいは日本についていうなら、この国の銀行が貸出しの方針とした担保融資の偏重には問題があったかもしれない。わが国の会計制度が大きな欠陥をかかえて、特有の問題を招いたこともたしかであろう。しかしながら、ここに生じて、モラルハザードの主犯は担保主義、これを解き放つ救世主は会計のビッグバンということになるのだろうか。

なるほど情報の開示は事件解決の鍵であろう。しかし、わたしたちの迷路は多くのドアで閉ざされている。情報という鍵は、いわば、すべてのドアを開くことが出来る理想的なかたちに入手可能であるのだろうか。いいかえるなら、マスターキーとしての会計の能力と可能性は問われるところである。

ところで、アメリカのS&Lの破綻に、職業人としての会計士、あるいは技術としての会計が、これらの事件に少なからず深く関与していたことは知られるところである。なるほど、これは例外的な会計の悪用、したがって会計、ましてやあるべき会計自身には責任はないとされるかもしれない。しかし、ここでの事件にみるなら、アメリカ型の会計に向かう手放しの期待は、ある面、少なくとも、楽観的にすぎるおそれがある。⁽²⁶⁾

会計人の倫理は万全ではない。あるいは、わたしたちの会計の能力は、論理的にも、経済的にも、限界のなかにある。わたしたちは、現実の世界に、

(26) 日本の会計士の職業倫理については、つとに、公認会計士の監査をめぐって、問題とされるところである。しかし、アメリカのS&Lの破綻にもみるように、あるまじき職業人の存在は、とりわけ、日本に於いてだけ、とりあげられるべきものでもないだろう。むしろ、この小論の注意した担保の役割との関連では、わたしたちは、情報の質を保証する会計能力について

種々のファジーなかたちの会計システムを以て、備えることができるだけである。

わたしたちの小論は、迂遠ではあるが、このようなファジーな会計の方向を、最小限の会計モデルのなかに、探るための出発点であった。会計システムは、所与の情報環境のなかで、補完的に機能することができる。現実的な可能性を目指す会計は理想のゴールを見つめる会計とは別のかたちをとるのではなからうか。

ㄨての日米両国の資源的な大きさの違いを指摘しておきたい。たとえば、日本の側に会計能力の不足があるとしてみよう（日米にみる会計士の数の上での圧倒的な違い、監査法人のスケールの違いなどを想起されたい）。わたしたちがとりあげてきた資金供給が過剰にあるケースを考えてみよう。日本の担保主義は反省されて、融資の審査に、こぞって会計が要求されればどうだろうか。資金の一部は、ここに、投資の機会やタイミングを失うことになるはずである。会計に諸種の制約があるとき、担保主義がかかえる問題の大きさは、このような関連でも、各国、各状況に応じて異なることになるとしたい。